

令和8年度未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会（小学校外国語）

1. 実施概要

日時： 令和8年6月19日（金） 13:30～16:20

場所： コンパルホール 多目的ホール（対面）及び オンライン

目的： 各小中学校及び義務教育学校の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び評価に関する説明・講義等を行うことにより、小学校教員の授業力向上に資する。

2. 開会行事「大分県教育委員会あいさつ」

義務教育課 課長 桐野 潤

- 令和7年度大分県学力定着状況調査における質問調査において、「英語が好き」「英語が分かる」と肯定的に回答した児童生徒の割合が上昇。
- 小学校英語専科教員の勤務校における「英検 ESG」の結果では、小学校6年生の段階で、半数の児童が中学校初級程度である英検5級相当と判定され、一定程度の英語力が身に付いており、各学校において、「楽しくて力の付く授業づくり」が推進されている成果と捉えている。
- 令和8年度「改善の重点」において、「読むこと」「書くこと」の領域における、小中連携の推進を重要な留意点として掲げているため、小中の先生方における協議等を通して、小中連携を進め、児童生徒の資質・能力の育成に努めていただきたい。

2-1. 行政説明・協議

テーマ：「大分県における外国語科の課題と授業改善」

説明者：大分県教育庁義務教育課 指導主事 二宮 健吾



① 大分県における外国語教育の現状と課題

- 大分県学力定着状況調査の児童生徒質問調査によると、英語に対して肯定的な回答（好き・わかる）をする割合は増加傾向にある。
- しかし、小学校から中学校への接続において、15%ほど愛好度が低下し、「小中のギャップ」が課題となっている。
- 特に「読むこと」・「書くこと」の領域に課題が顕著であり、令和7年度大分県学力定着状況調査では、小学校で既習の「How many～?」を用いる問題において、中2の無解答率が34.7%であった。
- これは、生徒の約1/3が読むこと・書くことに難しさを感じ、学習に対して解く前からあきらめてしまっている状況を示唆している。

② 小学校における「読むこと」の目標の再確認

○小学校卒業段階で求められる「読むこと」の力は、以下の2点に整理される。

- ・目標（ア）： 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方（名称読み）を発音できること。
- ・目標（イ）： 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や表現の意味がわかること（イラスト等の補助を得て意味を推測する）。

○中学校側からは「もっと読めると思っていた」という声も上がるが、小学校では「音声で慣れ親しんだものを、文字と結びつけて推測できる」レベルの達成が重要である。

③ 授業改善に向けた具体的な指導の工夫

○「読むこと」の指導においては、音声で十分に慣れ親しんだ後に文字に触れるプロセスを徹底することが強調された。

- ・効果的な指導事例（東指導教諭の事例）： 教科書の文字を指で押さえながら発音する「押さえ読み」により、音と文字を視覚的に関連付ける指導が紹介された。
- ・継続的な指導： 文字指導を単元の最後にまとめるのではなく、毎時間、着実かつ継続的に取り組むことが、中学校での苦手意識緩和につながる。
- ・中学校での配慮： 中学校初期段階では、いきなり黙読させるのではなく、デジタル教科書等を活用して音声を繰り返し聞き、音から文字へ入るなどの工夫が求められる。

2-2. 協議「小学校の学びを中学校に円滑につなぐための指導の在り方」

○J グループの代表による発表内容

○主に4つの視点でまとめられた。

1. 音読・音声からの導入

- ・音声と文字の連動： 聞いたり話したりして十分に慣れ親しんだものを、今度は指で追いながら読むことで、まず「聞く」要素から文字へとつなげる。
- ・対話的な音読： 友達が書いた英文を声に出して読むなど、子ども同士での音読活動を取り入れる。
- ・中学校での配慮： 中学校の指導においても、いきなり音読や黙読をさせるのではなく、「音声のみで聞く」→「イラストを見ながら音声で聞く」→「文字を見て聞く」といった順序で、必ず音から入ることで文字の認識を深める。

2. イラストや写真の活用

- ・意味の推測： イラストや写真を見て意味がわかった状態にした上で、そこに文字を添える工夫を行う。

3. 文字と音の規則性（フォニックス等）

- ・発展的な指導： フォニックスなどの発展的な指導を少しずつ取り入れる。
- ・教材の活用： ユニットの最後にある「Sounds and Letters」（「NEW HORIZON」東京書

籍)をしっかりと定着させておく。これができていると、中学校に入ってから語彙の習得がスムーズになる。

4. チャンツの継続的な活用

- ・慣れ親しみ： 毎時間チャンツを行うことで、表現に十分に慣れ親しむ。
- ・小中連携： 小学校で親しんだチャンツを中学校の復習で活用することで、既習表現の理解をより深めることができる。



テーマ：「次期学習指導要領改訂の方向性と、今、大切にしたいこと」

講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 早川 優子 氏

① 次期学習指導要領改訂の3つの視点

○現在検討が進められている次期改訂の柱として、以下の3つの視点が示された。

- ・Excellence (主体的・対話的で深い学びの実装)： 学びの質をより確かなものにする。
- ・Equity (多様性の包摂)： 多様な子どもたち一人ひとりの学びを保障する。
- ・Feasibility (実現可能性の確保)： 現場での実施のしやすさを考慮する。

○特に、AI時代において「なぜ人間が外国語を学ぶのか」という本質的な意義が問われている。AIは正解を出すのが得意だが、人間同士のコミュニケーションには「もどかしさ」や「相手を理解しようとする過程」があり、それが人間関係を豊かにする。

② 「深い学び」の具現化と資質・能力の育成

○外国語科における「深い学び」とは、単なる活動の繰り返しではなく、既習の知識・技能を相互に関連付け、目的や場面、状況等に応じて活用し、自らの考えを再構築する姿を指す。

- ・知識・技能の統合： 単語を個別に覚えるだけでなく、「好きなものを言うときはI like～を使う」といった文構造と音声を結びつけ、統合的に理解することが重要である。
- ・単元構想の重要性： 毎時間の「点」の指導ではなく、目標・指導・評価が線で結ばれた単元計画（単元構想）が、資質・能力の育成には不可欠である。

③ 言語活動の再整理：2つの活動の往還

○次期改訂における大きな変更点として、従来の「言語活動」という言葉を整理し、以下の2つの視点で構成することが提案されている。

- ・「コミュニケーション活動」： 主に思考力・判断力・表現力を育成する活動。

- ・「コミュニケーション活動を支える活動」：知識・技能を身に付け、習熟させるための活動（語彙・表現の練習等）。

○これらを切り離すのではなく、単元の中で「往還（行ったり来たり）」させることが肝要である。コミュニケーション活動で足りない知識に気づき、支える活動に戻って練習し、再びコミュニケーションに活用するというサイクルが、使える英語の習得を促進する。

④ 「学びに向かう力」の評価の方向性

○「学びに向かう力・人間性等」については、以下のプロセスを重視する。

- ・やってみたいという「好奇心（初発の思考・行動）」
- ・目的達成のための「他者との対話・協働」
- ・自分の学びを振り返る「主体的な調整」

○これらのプロセスは、評価のための記述を増やすことではなく、授業の中で子どもたちが主体的に学びを調整できているかという「学習の過程」として捉え、思考・判断・表現の評価とも関連付けていく方向性が示された。

4. 今後の展望

○今回の協議会を通じ、小学校外国語教育における「読むこと」への早期対応と、小中一貫した指導の重要性が改めて浮き彫りとなった。

- ・小学校段階での基盤作り：音声で十分に慣れ親しんだ語彙や表現を、文字と結びつける指導を継続的に行う。特に東先生の「押さえ読み」のような、身体感覚を伴う音と文字の関連付けが有効である。
- ・単元構想への意識改革：単なる活動の羅列ではなく、次期改訂を見据え「コミュニケーション活動」と「コミュニケーション活動を支える活動」を戦略的に往還させる単元計画を構築する必要がある。
- ・小中連携の深化：中学校側が小学校の到達目標（イラストを参考に意味を推測する段階）を正しく理解し、初期段階での丁寧な文字・音声指導を行うことで、中2段階での学習意欲低下を防ぐことが期待される。

○本協議会での学びを各地区・各校に伝達し、大分県の子どもたちが「楽しく、かつ確かな力がつく」外国語学習を継続できるよう、組織的な授業改善を推進していく。

